

天使たちの課外活動2

ライジャの靴下

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

連邦大学惑星の北大陸に冬が訪れ、そろそろ雪がちらつこうかというある日のこと――。

「課外活動の範囲には人捜しも入るのだろうか？」
躊躇いがちに言い出したライジャに金銀黒天使は

興味深げな視線を向けた。

課外活動は一種の同好会に近いもので、基本的に『人の役に立つこと』を目的としているが、単なる同好会とも少し違う。学生たちはその活動を自分の経歴のプラスとして捉えているからだ。

ルウ、リイ、シエラの三人は先日、

『困ったことがあったらご相談ください』

という実は大雑把な活動を始めたばかりである。

「誰か捜して欲しい人がいるんだ？」

「いかにも」

「名前はわかる？」

「いや」

「どんな人？ 顔や年齢は？」

「わからない」

今度は三人のほうが困惑顔になった。

顔も名前もわからない人を捜したいとはどういうことだという疑問を感じ取って、ライジャは懐から何か取り出した。

「これを見ていただきたい」

それは毛糸の靴下だった。この季節にはよくある膝から下を覆う長靴下だ。

寸法からして男物のはずだが、色と模様がすごい。真っ赤な毛糸の全面に真っ白な毛糸で大小の雪の結晶模様が編み込まれている。さらには雪の結晶の上に極小のラメストーンが貼りつけられ、きらきら輝いている。これは粉雪を表現したもののようだが、あまりの華やかさにシエラもリイも眼を丸くした。

「ずいぶんとまあ派手な……」

「おれでもこれを履いて歩く勇氣はないな……」

リーの感想に、シエラがおもしろそうに笑った。

「あなたがそんなことをおっしゃるとはお珍しい」

「長いズボンならいいよ。隠れて見えなくなるから。

短いズボンだとこれが丸見えだろう。いくら何でも目立つじゃないか」

もともと目立っている人が何を今さらとシエラがますます呆れて苦笑する傍で、ルウが言った。

「これだとライジャが履いても丸見えだよね」

ライジャは惑星トゥルークの僧侶で、彼らは衣食住全般に亘って質素を旨としている。

それも修行の一環らしい。

学生たちが厚いコートや襟巻きで身を固めるこの季節にライジャは裸足に草履で歩いているし、つい先日まで袖無しの上着一枚で過ごしていたくらいだ。さすがに今は長袖の上着を羽織るようになったが、これがまた薄手で丈も短いのだ。今も裸足で膝から

下はむき出しのままだ。

「風邪引かないの？」

「もつと寒くなれば足袋も履くし、脚絆も巻くが、

覚えがある限り風邪を引いたことは一度もない」

リーがすかさず同意した。

「おれもないな」

この少年も寒さにはめっぽう強く、今も七分袖を着ている。本当は袖無しでも支障はないらしいが、『見ているほうが寒い！』という周りからの苦情に負けて、これでも少し厚着をしているらしい。

ライジャも他の友人たちから同じ文句を言われているに違いないので、ルウが笑って言った。

「あなたがあんまり寒そうに見えるから、見かねた親切な人が贈ってくれたんじゃない？」

「ならばよいのだが……」

ライジャはキャンベル大学で宗教学を学んでおり、大学付属のタウンゼント寮で暮らしている。

この靴下はその寮宛に届けられたそうだ。

しかし、^{かんじん}肝心の差出人の名前がない。宛名もない。

「いつも裸足のトゥルークの留学生の方へ」

と記されたカードが添えられていただけだという。

「無記名で届いたのか？」

「変ですね。それでは配達は受け付けてくれないと思いますけど」

「学内便で届けられたのだ」

中学生のリーとシエラは耳慣れない言葉に不思議そうな顔になり、大学生のルウが説明した。

「それも課外活動の一種だよ。ぼくは使ったことはないけど、サフノスクにもある。時間に余裕のある学生が他の学生宛に配達を引き受けてくれるんだ。

ボランティアだから報酬は受け取らない。ただし、届け先は原則的に同じ大学内に限られてる」

「それ、誰が何のために使うんだ？」

「よくあるのは物の貸し借りみたいだよ」

直接会って渡したり返したりする暇がない。だが、同じ学校の学生宛に届けるのに配達料金を払うのは

少々もつたいないと考える学生たちが、よく使っているようだ。ルウは説明した。

「他には誕生日や、季節のお祝いのカードなんか一般的みたいだね」

今時、ほとんどの連絡事項は通信文で事足りるが、だからこそ直筆の手紙は『一目置かれて』いるのも確かだ。学生たちにとってはさりげない好意を示すもつとも効果的な手段でもある。

「学内便なら送り主が無記名でも問題ないのか？」

「ううん。あるはずだよ」

手紙にせよ荷物にせよ、差出人不明では危なくて迂闊に預かれるものではない。

善意のボランティアのほすが悪質ないやがらせ、もつと悪くすれば犯罪の片棒を担がされる可能性もありうるからだ。

それなのに差出人不明の小包が届いたというのは解せないのだが、ルウは微笑しながら言った。

「名前を伏せた人からのお布施なんて珍しくないと

思うけど。誰か親切な人が贈ってくれたんだからと感謝して素直に受け取る——じゃあいけないの？」

「トゥルークならば無論そうしている。お志こころざしに感謝してありがたくいたただくのだが……」

浅黒いライジャの顔には鬩かりがあつた。

「この場合は困るのだ。二重に困る」

「というと？」

「師に言われているのだ。留学中は身元の明らかでない方からの寄進は受け取ってはならないと」

トゥルークの僧侶の戒律に「人の善意を断つてはならない」というものがある。

トゥルークは伝統的に貧しい星だ。中でも僧侶は質素な生活を旨としており、自給自足が原則である。

自らを律し、敢あえて厳しい生活を送る僧侶たちにトゥルークの人々は無上の敬意を払って接しており、布施を渡すことが自らの徳にもなると信じている。

小さな子どもがおこづかいを握りしめて、立派な人と話す緊張と誇らしさに頬ほを紅潮させながら、

「お坊さまに、さしあげます」

と手渡してくることも珍しくないのだ。

それがおこづかいではなくきれいな小石だったり虫の抜け殻むしがらだったりすることもあるが、僧侶たちは常に笑顔で「ありがとう」と受け取っている。

ところが、連邦大学惑星ではこの慣例が通じない。ライジャの師匠のアドレイヤも若い頃連邦大学に留学していたことがある。

若き日のアドレイヤはトゥルークの僧侶の戒律を聞きかじった学生たちに散々からかわれたらしい。

椰揄やゆするだけならまだしも、にやにや笑いながらゴミを押しつけてくる学生までいたそうだ。

「ほら、こいつを寄付してやるよ。どんなものでもありがたく受け取るんだろう」

その時のアドレイヤは既に高位の僧侶だったので反発することなく黙って受け取り、使えるものなら自分で使い、どうあっても使い道のないものだけをあらためてゴミ箱に捨てていたという。

人からいただいたものを無駄にしてはならないという戒律に従ったまでだが、その様子が悪質な学生たちには、アドレイヤは自分たちを恐れて萎縮し、^{だくだく} 諾々と言いなりになっているのだと見えたらしい。

何をしていてもあいつは自分たちに逆らえないんだと思ひこんだ学生たちの行為は悪質さを増していき、とうとう麻薬まで押しつけられたという。

アドレイヤは無論それが麻薬だとは知らなかった。いつもと同じように黙って受け取ったが、ものが薬である。薬効もわからないのに服用するわけにはいかない。かといって迂闊には捨てられない。専門機関に鑑定してもらおうと思つて懐にしまい込んだ。すると、悪辣な学生たちは自分たちで押しつけておきながら『彼が麻薬を持っています』と、教師に告げ口をした。

こんな濡れ衣を着せられても、今までの態度から、アドレイヤは自分たちを恐れて口をつぐみ、黙つて罪を被るはずと彼らは踏んだらしいが「それはどう

したのか？」と教師に訊かれたアドレイヤは「誰それにいただいたものです」と正直に話したそうだ。「嘘をつかない」というのもトウルークの僧侶の戒律の一つである。

アドレイヤは進んで薬物検査にも応じた。無論、結果は陰性だった。それまでのアドレイヤに対する数々のいやがらせは周囲も目撃していたから、彼は冤罪を着せられた被害者だとすんなり認定されて、無事に麻薬所持の罪から逃れられたという。

アドレイヤはこうした自らの体験談を教訓として弟子に語り、無用な騒動や軋轢を避けるためにも、異国の地では時に戒律に柔軟な変更を加えることも必要なのだと淡々と論じたそうだ。

妙に生真面目な師匠と弟子のやりとりがいやでも想像できて、ルウは苦笑しながら言った。

「災難だったねえ。気持ちにはわかるけど、そこまで警戒しなくても、これはただの靴下だよ」

「そのことなのだが……」

ライジヤはルウとシエラに眼をやつて尋ねた。

「お二人は編み物が得意だと伺つた。そこで鑑定をお願いしたいのだが、これは手編みだろうか？」

「そうです」

「かなり上手だよ。指もちゃんと五本編みである」

「では、これを編んだのは女人だろうか？」

「たぶん、そうじゃないかなあ」

「編み物をする男性も大勢いますが、男性ならこの色合いと模様は選ばないと思いますよ」

「やはり、そうか」

ライジヤの表情は暗かつた。

トールークの僧侶がもつとも重んじている戒律に「女性に触れてはならない」というものがある。

彼らは僧侶になつた時点で生涯を独身で過ごすこと誓うのだ。当然、恋愛も考えられない。

だが、トールークの僧侶の戒律を知らない女性がライジヤに熱を上げることが充分あり得る。

それもこれもライジヤが魅力的な男性だからだ。

彼は浅黒い肌を整つた目鼻立ちで、顔には独特の

刺青を施し、真つ白な髪は腰まで長く垂らしている。

長身で、細身ながら鋼のように鍛えた身体つきで、

一見すると恐そうだが、銀にも見える灰色の瞳には

思慮深い光が浮かんでいるし、性質も穏やかだ。

身なりや宗教こそ変わっているが、それも魅力と

感じる女学生は決して少なくないはずだった。

現に先日このことが原因で、ちよつとした騒動があつたばかりなのである。

「これが善意の施しならば、僧侶としてありがたくいただくのだが……女人からのわたし個人に対する思慕の表れだとしたら受け取るわけにはいかない」

リイが言つた。

「アドレイヤおじさんもかなりの美男だけど、そういう問題はなかつたのかな？」

「あつたと思う。師は詳しくは語らないが」

ルウがまじめくさつて言つた。

「本人がいくら恋愛をするつもりはないと言つても、

向こうが納得してくれるかどうかは話が別だもんね。そのところだけはアドレイヤに同情するよ」

リイとシエラも頷いた。

「なまじ美男だと苦勞するよな」

「若いご婦人に『恋愛お断り』と言つてもなかなか通じませんから」

「いや、それはよいのだ」

一番困っているはずのライジャが真顔で言うので、三人ともきよとんととなった。

「いいんですか？」

「何事も修行だ。贈り主がそのような感情を抱いているのがわかったなら、後は手を尽くして納得していただくのみだ。どうしてもそれが無理なら距離を置けばよい」

「そううまくいくかどうか——と三人は思ったが、ライジャには別の心配があったらしい。

「しかし、この品が贈り主の純然たる厚意によって届けられたものなら、わたしはその方に感謝の意を

述べなくてはならない。それが人としての最低限の礼儀だと思ふのだ」

三人はちよつと微笑した。

彼が気にかけているのは好ましくない恋慕の情を向けられることではなく『お礼を言わなくては』という良心のうずきなのだ。

「わかった。そういうことなら力を貸すよ」

「目的は『謎の贈り主を突き止める』ことだね」

「まず配達した人に確認してみてもどうでしょう」

「それはもうやってみた」

その日タウンセント寮を訪れた配達人は三人いる。一人ずつ確認してみると理工学部のステイブ・ブラウンという学生が該当したそうだ。

「わたし宛の小包が無記名だったと告げると、彼はひどく驚いていた」

「自分で届けたのに？」

「実際に届けた人間と集荷した人間が違うのだ」

ブラウンは配達経路を示され、郵便袋を渡された

ただだという。集荷したのは心理学専攻のジョン・タイラーという学生だ。

「そこでタイラーに確認すると、彼も驚いていた。タイラーは自分が受け付けた手紙と荷物にはすべて送り主の記名があったのを確認したと主張し、その控えも提示してみた。その控えではタウンゼント寮宛の手紙と荷物は三つなのだが、ブラウンは四つ届けたと言っている」

「配達途中で荷物が一つ増えたってことか？」

ブラウンは自転車で六ヶ所を回ったが、移動する途中、郵便袋をいちいち持ち歩いたりはしなかった。「タウンゼント寮は五番目の配達先だったそうだ。

ブラウンは途中の四ヶ所に立ち寄った際、郵便袋を自転車にくくりつけたまま自転車の傍を離れている。いずれも時間になると三、四分ほどだったそうだが、その隙に、自転車に残された郵便袋に余計な荷物を紛れ込ませるのは不可能ではないらしい」

「それができたことは謎の贈り主はキャンベル

大生かな？」

「しかし、院や専門研究所まで含めると、我が校の学生は三万人を超える。その半数が女人だ」

「いや、もっと絞れるよ、この贈り主は少なくともライジャを知ってる。実際に見たことがあるんだ」
 リイの言葉にルウが頷いた。

「同感だね。この靴下も足の指を五本編みであるし、カードにも『いつも裸足の……』って書いてある。

つまりこの贈り主はライジャが普段、どんな恰好で歩いているかを知ってるんだよ」

断言して、ルウはあらためて嘆息した。

「それにしても、この色と模様はないよねえ……」

シエラも困惑顔で頷いている。

「同感です。リイも言いましたけど、これを人目に晒して歩く勇氣のある男性はそうはいないはずですよ」

するとライジャが不思議そうに言った。

「わたしには特に問題があるとは思えないのだが、

この色と模様はそんなにいけないものなのか？」

これには三人とも苦笑を禁じ得なかった。

「ある意味、尊敬します」

「アドレイヤおじさんも相当派手な人だからなあ」

「抵抗がないなら実際に履いて歩いてみたらどう？」

それを見た人の反応から贈り主を割り出すっていう手もあるよ」

ライジヤは首を振った。

「靴下の色にも模様にも異常を感じないが、これを履くことはできない」

「どうして？」

「恋愛感情が籠もっていたらまずいから？」

「いや、今の気候だ。まだそれほど寒くもないのに、このような暖かそうなものを着用するのは贅沢に当たると思うのだ。それは致しかねる」

「何事も修行か」

リイは苦笑し、シエラが請け合った。

「では、編み物の達人を当たってみましょう」

こういうものには編み方の癖が出る。

個性といってもいいが、その癖は一人一人違う。

編み物作品をたくさん知っている達人なら編んだ人物の見当がつくかもしれない。

シエラはライジヤに断って靴下を預かり、翌日の放課後、マティルダ・ラムの下を訪れた。

彼女は通称『ティルダおばさん』。

シエラが編み物の師匠と仰ぐ人物である。

編み物歴五十五年を誇るミセス・ラムは薔薇色の頬をした可愛らしい老婦人で、シエラが持ち込んだ靴下を見て破顔した。

「あらまあ、男の人に贈るにはずいぶんと派手ね」

「そうなんです。わたしの知人がもらったのですが、贈り主の意図がわからなくて」

「というと、匿名で送られてきたの？」

「はい。それで困っているのです。いやがらせではないと思うのですが……」

「それはないでしょう。編み目を見ればわかるわ。」

とても丁寧ていねいに編ひんでいるもの。いやがらせでこんな
きちんとした仕事はしないわよ」

「わたしもそれは感じました」

「どれどれ、よく見せてちょうだい」

ミセス・ラムは眼鏡を掛けて靴下をひっくり返し、
編み目を丹念に調べた。

「かなり上手な人ね。糸を見てみましょうか」

「——毛糸をですか？」

「そうよ。この赤は発色からしてオルセツト社の
『アペ』シリーズだと思うけど、あそこは赤だけで
二十色以上の種類があるはずだから」

さすが達人は毛糸を見ただけでそのメーカーまで
ある程度はわかるらしい。

「あまり参考にならないかもしれないけど、色番号
だけでも特定してみましょう」

そう言つて一度部屋を出て行つたミセス・ラムは、
小型ながら大学の実験室で使われるような本格的な
顕微鏡を持って戻つてきた。

老婦人が独り暮らしをしている家でこんなものを

見るとは思わなかつたシエラは驚いたが、ミセス・
ラムは慣れた手つきで靴下の端を顕微鏡にセツトし、
照準を操作して毛糸をどンドン拡大していった。

「やっぱりオルセツト社の『アペ』ね。色番号はM
113……あら！」

ちよつと驚いたような声を発したミセス・ラムは
顔を上げて微笑した。

「運がいいわ。学校名が入つてる。これならすぐに
わかるわよ」

シエラの話聞いてルウは驚いた。

「毛糸に学校名が入つてるって？」

「正しくは毛糸を構成している纖維せんいに極小の文字が
刻んであるそうです。もちろん肉眼では見えません。
これはメーカーが行っているサーピスだそうですよ。
多少の料金はかかりますが、頼めばどんな名前でも
入れてくれるそうです」

「へえ……ずいぶん長いこと編み物をやってるけど、そんな話は初めて聞いたよ」

「わたしもです。ミセス・ラムのお話では趣味で編んでいる人は知らなくて当然だということでした。

逆に言えばオリジナルの作品を発表して仕事にしている人や、バザーの常連の人なら間違いなく知っているそうです。というのも、このサービスは盗難を防ぐためのものなんです」

「ああ、なるほどねえ」

大いに納得して頷いたルウだった。

編み物は絵画や彫刻カキウキと違って作品に作者の名前を入れることは少ないが、技術の優れた作品が注目を集めるのはどんな分野でも同じことだ。

「実際にあつた例ですと——たとえば赤ちゃん用の靴下や帽子など小さな作品は同じものを複数編んでバザーに出品する場合がありますが、心ない人がそれらを何組か盗んで、他の会場で、何食わぬ顔で自分の作品として販売して利益を得ていたとか」

「それは悪質だね」

「はい。善意のバザーでそんな犯罪が行われていたことも問題ですが、もっと深刻なのは作品に等級をつける品評会だそうです。そこには編み物を本職にしている作家たちがそれぞれ趣向を凝こらした作品を出品するのですが、完成した作品を盗まれて他人の名前で発表されたりしたら取り返しがつきません。ですから、ほとんどの作家は製作過程を記録に残すだけでなく、毛糸にもわざわざ自分の名前を入れて作品をつくり、それを出品するそうです」

「本格的なんだねえ……」

たかが品評会と侮あなごれない。そこでの評価が作家の業績に直接影響するのだから、著作権保護のために必要な措置らしい。

「ミセス・ラムは品評会の審査員を頼まれることも多い方ですから記名のご存じだったんです。ちなみに名前が入っていたのは赤い毛糸だけで白い毛糸にはありませんでした。他のメーカーの名前と

色番号が入っていただけです。——それにもう一つ、ミセス・ラムは『この靴下を編んだ人の作品を他に見た覚えはないわ』ともおっしゃっていました」

「さすがだね。それで、赤い毛糸の繊維に書かれていた学校名は？」

「『ホーマー大学手芸倶楽部』です」

「ホーマー大学？」

あまり馴染みのない名前にルウは首を傾げたが、シエラも訝しげな顔だった。

「調べてみたらログ・セールの大学なんです」

「ええ？ それは変だね」

キャンベル大学があるのはサンデナン大陸南岸、

ログ・セールは隣の大陸だ。

「キャンベルに協力者がいたってことかな？」

「可能性はありますね」

「わかった。倶楽部の代表者に話を聞いてみるよ」

「お願いします。わたしのような子どもが訊くより、あなたのほうが適任だと思いますので」

これほどきちんとした態度と話し言葉のシエラを頭から子ども扱いする学生はそうはいないはずだが、大学生のルウのほうが適任なのは確かだ。

シエラとの通話を終えた後、ルウも自室の端末でホーマー大学について調べてみた。

ログ・セール大陸の西岸、サライ州ホーマー市にある大学で、医療工学、保健化学、看護福祉、医療ソーシヤルワークなどに特化しているとある。

言うなれば医学以外の医療活動を専門としている大学だということだ。大学の理念を読むと、病気や怪我は治療すればそれで終わりというものではない。実際にはそこから患者が元の生活を取り戻すまでが長い道のりなのであり、当大学はあらゆる方面からその補助をする専門家を育てる機関だと謳っている。事実、医療関係機関に多大な影響力を持つっており、毎年優秀な卒業生を各方面に送り出し、それぞれの分野で即戦力として活躍しているとある。

大学の部活動について紹介されている頁を見たが、

手芸倶楽部が載っていない。

もしやと思い、課外活動で検索を掛けてみると『ホーマー大学手芸倶楽部』が適合した。

活動案内と代表者の名前及び連絡先が載っている。代表者はホーマー大学看護学部のジョエル・ウッド。

意外にも男子学生だ。

ルウはあの靴下の写真を添え、ジョエルに宛てて通信文を出した。

この靴下が無記名で友人の元に届けられたこと、毛糸にホーマー大学手芸倶楽部の記名があったこと、友人も自分も差出人を特定したいと思っていること、できれば直接話したいので連絡可能な時間を教えてもらいたいと記し、自分の通話可能時間帯も記した。すると、その夜にジョエルから連絡があった。

「初めまして。ジョエル・ウッドです」

ジョエルは人当たりのいい笑顔の好青年だった。

ルウも名乗り返し、連絡をくれたことに礼を言い、挨拶を済ませたジョエルはさっそく本題に入った。

「お尋ねの毛糸についてですが『アペ』シリーズのM113番は既に廃番になっていきます」

「製造中止になったんですか？」

「いいえ。メーカーでは今でもつくられていますよ。ただ、当倶楽部では不人気色だったので、今はもう扱っていないんです」

ジョエルは手元の記録を見ながら説明した。

「問題の毛糸はメーカーから一年前に購入しました。一年経っても在庫が残っていたので先日文化祭でバザーに出品し、めでたく完売しました」

「一般人も買っていったんですか？」

「もちろんです。大変な賑わいでしたよ。市価よりかなり安い値段で提供していますから」

「ですけど、その毛糸にはそちらの倶楽部の名前が入っているんでしょう。それを簡単に部外者の手に渡してもいいんですか？」

「おっしゃるとおりです。購入される方には『この毛糸を使った作品を無断で販売しないこと』さらに

『品評会に出品する際にはうちの毛糸の使用を申告すること』を確約してもらってお譲りしています」

ルウは身を乗り出した。

「ということは——買った人の名簿がある？」

「ありますよ。遺憾ながらこの規約に違反する人が出ないとも限りませんから。その時になって『誰に売ったかわかりません』では通りません」

「その人たちの名前を教えてくださいと言いませんが、差しつかえなければ、どのくらいの数の人が買っていったのかだけでも教えてもらえませんか？」

「八百五十七人です」

多くても五、六十玉を売ったものと想像していた

ルウは椅子から転がり落ちそうになった。

「何でそんな人数になるんです!?!」

ジョエルはちよつと申し訳なさそうに言った。

「誰がどの毛糸を買ったかまではわからないんです。前回のバザーでは不人気だった三十種類の毛糸玉を六千三百十五玉、人気色でしたが中途半端に余った

毛糸玉——ざっと七百種類ほどですが——これを三千七百五十六玉、合計一万七十一玉を販売しました。一玉でも購入する際は身分証明書を提示の上、住所氏名を記載してもらったんです。その人数が全部で八百五十七人になるんですが、言うまでもなくこの名簿をお渡しすることはおろか、お見せすることもできません。完全な個人情報ですから」

ルウは愕然としていた。

簡単に言ってくれるが、毛糸玉が一万ともなれば膨大な量である。一ボランティア団体がそれだけの毛糸を保管できる場所を持っていることも驚きだが、需要があるということ自体が信じられない。

「そちらの手芸倶楽部は……ずいぶんと大がかりな課外活動なんですね」

ジョエルは少しばかり得意そうな顔で説明した。

「手芸作品の寄贈に関しては、量はもちろん質でもサライ州一のボランティア団体だと自負しています。うちはもともとホーマー大学の部活だったんですが、

卒業後も関わる人が多く、例外的に課外活動という形を取るようになりました。ただ、完全に大学から独立しているわけでもない。ホーマー大学は当倶楽部に資金援助するスポンサーとして密接に関わっていますし、代表者や倶楽部の運営も現役の学生が務めるのが慣例なんです」

課外活動とはもつと地道でささやかなものだと思っていたが、いろいろな形態があるものだ。

「毛糸を売った文化祭はいつだったんです？」

「先週の土日の二日間です」

「友達のところには靴下が届いたのはその前ですよ」

ジョエルは肩をすくめた。

「となると、それを編んだのはうちの部員ですね。」

うちの部員なら記名入りの毛糸を個人的に購入して作品をつくることもできます。販売目的でないなら申告の義務はありませんから」

八百五十七人を勘定に入れずにすむことに少し安堵してルウは訊いた。

「そちらの部員は何人いますか？」

「学生が二百五十人、社会人が三百七十二人です」

再び暗雲が立ちこめる。

だが、贈り主が恐らくライジャを知っていること、キャンベル大学に知り合いがいると思われることを鑑みると、学生であることはほぼ間違いない。

「学生の部員のうち女子学生は？」

「二百十八人です」

前途多難の予感にルウはため息を吐いた。

「それじゃあ毛糸もたくさん必要になりますね」

「そうなんですよ。いくら注文しても足りません。」

うちの部員資格は簡潔で「最低でも年に二作は倶楽部に自作の作品を納めること」。これだけですが、熟練者になると短い時間で何作もつくれますからね。毎月複数の作品を提出する部員もいるくらいです」

「ですけど……部員はそちらから無料で毛糸を提供してもらえないのですよね？」

「もちろんですよ。それじゃあうちは破産します。」

卸値おろしねに近い値段で提供しているのは確かですよ。

メーカーも新色が出るたびに、使ってくれないかとうちに売り込みを掛けてきます。部員には品評会の常連も大勢いますから、格安で売ってもいい宣伝になるでしょう」

「部員に売る場合も、誰がどの毛糸を購入したかは記録してないんですね？」

「そうです。頼まれれば領収書を発行していますが、購入者までは控えていません。ただし、何日に何の毛糸が何玉出たかは記録しています。そうしないと残り数が把握はあくできませんから」

ジョエルは過去の記録を見ながら説明した。

「アペのM113は五百玉注文しています。新色はだいたいそのくらい取るんです。人気色ならすぐに減るんですが、この毛糸は一年経っても三百玉近く余っていました」

「どうしてでしょう。赤い毛糸って、そんなに使にくい色じゃないと思いますけど」

「いえ、この時は確か赤だけで五色仕入れたんです。二千五百玉ですね。他の色は順調に減ったんですが、他の赤に人気が集めた結果、あれだけはほとんど使われずに残ったんです。毛糸玉というものは電子情報などと違って劣化する素材ですから、なるべく古い素材は処分して新しい素材を仕入れたほうが、部員のモチベーションにもつながるんです」

ルウは少し考えて質問した。

「先程『無断で販売はできない』と言われましたが、それなら、そちらの許可を受ければ個人で販売することもできるんですか？」

「ええ。今それを言おうと思っていたところです。

うちが主催する展示即売会でしたら販売可能です」

「展示即売会？」

「そうです。月に一度、ホーマー大学のティンダルキャンパスで開催されます。参加資格は『一種類はホーマー大学手芸倶楽部の記名入りの毛糸を使っていること』。ですから一般の方はもちろん、うちの

部員も大勢参加しますよ。我々はその収益の一部を出品料として受け取り、運営に充てています」

つまりその即売会には先日在庫整理されたというM113を使った作品が出品される可能性が高い。

「その即売会、次はいつ開かれるんですか？」

「次の土曜です。ちよつとしたお祭りですよ。ぜひ遊びにいらしてください」

『ちよつとした』どころではない賑わいだっただ。

金銀黒天使とライジヤはティンダルキャンパスの入口で茫然と立ちつくした。

即売会は九時から始まるそうなので一行は朝早くサンデナンを出発して九時には現場に到着したが、キャンパスは既に大変な熱気だった。

それも当然で、聞けばこの即売会は出品者だけで五千を超えているという。

当然、品物を目当てに集まる客はそれ以上だ。

広大なキャンパスをびっしりと埋め尽くすように

テントが張られており、その下には大きな長い机が列を為している。どの机の上も手の込んだ華やかな手芸作品がびっしりと並べられている。

一つ一つの机がそのまま出店のようで、別の机はすなわち違う店だ。出品者も別なら会計も別らしい。

列と列の間の通路はかなり広く設けられているが、通り抜けるのもやっとなほど人で溢れている。

血眼になつて品物を奪い合つたりはしないが、人気のある店は賑わうようで、既に混雑を整理して案内する係が何人も出ている。

売られている品を見ると子ども用品の他に女性用、紳士用、高齢者に向けたものもある。帽子、手袋、靴下、セーター、ベスト、カーディガン、膝掛け、大きなものだと女性用のニットドレスまである。

特に手の込んだ作品は少し高いところに飾つて「価格はご相談に応じます」などと書いてある。

売り主と値段交渉をして譲ってもらえるかどうか決めるのだろうか。

売り物は編み物作品だけではなかった。手作りのぬいぐるみや人形、装飾品、雑貨や小物もある。

開場と同時に詰めかけた客が熱心に品物を吟味し、あちこちで早くも値段の交渉が行われている。

リイが呆気に取られながら言った。

「これ……ライジャには無理だ。この中を女の人にぶつからないで歩くのは至難の業だぞ」

何しろお客のほとんどが女性なのだ。

すれ違いざまに女性と肩や腕が触れただけでも、戒律を破ることになってしまう。そうなら彼は戒めとして十五日間、断食しなければならぬ。

「心配はご無用。わたしの問題であなた方にご尽力願っているのだから率先して動かなくては……」

ライジャは果敢に言ったが、リイは真顔で年上の友人に忠告した。

「買い物に傾けるご婦人の熱意と底力を侮るなよ。男が太刀打ちできると思ったら大間違いだぞ」

反論を試みたライジャは賢明にも口を閉ざした。

客観的に見てその意見は正しかったからだ。

ルウが何やら楽しげに言う。

「ほくとシエラでざっと見てくるよ。ゆっくり見て回れないのは残念だけど、編み物作品はこの辺りにまとまっているみたいだからね」

シエラもその意見に同意した。

「少し数が多すぎますが、運がよければ、同じ人が編んだ作品を見つけられるかもしれません」

「では、これを。鑑定に必要だろう」

ライジャはあの靴下を取り出して渡そうとしたが、二人とも断った。

「それはライジャが持ってた」

「なくても大丈夫ですよ。見分けられます」

「その代わりにライジャの携帯端末をシエラに貸してくれないかな？」

「そうすればわたしたちで連絡が取れますから」

「わかった。お任せする」

ライジャは屈託なく携帯端末をシエラに渡した。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。